

運動疫学 ニュースレター



日本運動疫学会
Japanese Association of Exercise Epidemiology

令和5年6月7日発行 No.19

第25回日本運動疫学会学術総会のご案内

第25回学術総会大会長／中京大学 重松 良祐

6月24日(土)・25日(日)の2日間、中京大学名古屋キャンパスを会場に第25回日本運動疫学会学術総会を開催いたします。新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置づけが2類相当から5類に移行して1か月以上が経った時点での開催となります。

大会テーマは「普及と継続」としました。身体活動・運動の良さは認知されつつあります。しかし、ポピュレーションレベルでみた実施率は十分ではありません。実施率を高めるために様々な取り組みがなされていますが、その取り組みがどの程度浸透し、効果をもたらしているのか、またどの程度持続しているのかについては、ほとんど測定されていません。本総会では普及と継続に向けて現状と今後の課題を知り、どのようなアクションが必要なのかを学べる講演やシンポジウムを企画しました。発表を聞くことで、「よし、明日から普及と継続に向けた活動をやってみよう」と思うようになることを狙っています。

学術総会概要

主催：日本運動疫学会

共催：中京大学スポーツ科学部

主管：第25回日本運動疫学会学術総会実行委員会

日程：2023年6月24日(土)・25日(日)

会場：中京大学名古屋キャンパス

テーマ：普及と継続

※詳細や最新情報は学術総会HP (<https://jaee-25meeting.jimdofree.com/>) をご覧ください。

プログラムならびに講演・シンポジウムの狙い・内容

- 大会長講演「普及と継続」(重松良祐・中京大学)
身体活動・運動の普及と継続に関する評価枠組みの解説。海外への普及活動の報告。
- 基調講演「国内高地プール整備によるアスリート支援の普及・継続戦略」(岡田真平・身体教育医学研究所)
運動施設という物理的環境を整備し、かつそれをレガシーとして継続的に活用するという挑戦的な活動を通して、アスリートと市民の両面への便益を考える。
- 教育講演1「スポーツツーリズム:スポーツで人を「動

かす」仕組みづくり」(伊藤央二・中京大学)

施策・自治体・振興・継続というキーワードを含めたスポーツツーリズムの視点から、身体活動推進の普及・継続について解説してもらおう。



- 教育講演2「学校現場における介入研究の進め方」(城所哲宏・日本体育大学)

学校現場にスタンディングデスクを導入する等、ユニークな取り組みを通して、教育機関での身体活動促進をどのような切り口で進めていくのかという手法、そしてそれをどのように継続させていくのかという視点を解説してもらおう。

- シンポジウム1「中高年者における地域レベルの身体活動の普及と継続」(鎌田真光・東京大学、齋藤義信・日本体育大学、清野諭・東京都健康長寿医療センター研究所、辻大士・筑波大学)

中高年者における地域レベルの身体活動の普及と継続という観点で長年の実績を積んでいる分野。どうやってポピュレーションに貢献していけば良いかを紹介し、また継続に向けてどう取り組むべきか等、論文には記載されていない実践ノウハウを中心に議論する。

- シンポジウム2:「子どもに対する運動の普及と継続を考える」(福島教照・東京医科大学、喜屋武享・京都大学、鈴木宏哉・順天堂大学)(学術委員会企画)

幼児や児童を対象とした運動の普及・継続について、どのようにアプローチするのが、この分野に精通している研究者が議論する。

- プロジェクト研究報告

プロジェクト研究認定のメリットとともに、プロジェクトで創出された様々な知見を報告いただく。

- アクティブガイド改定の現状の紹介
本年夏頃の公表に向けて動いているアクティブガイド改定の最新状況を報告する。

- 一般発表



第25回大会HPの
QRコード



中京大学
CHUKYO UNIVERSITY

CONTENTS

1. 第25回日本運動疫学会学術総会のご案内 …1
2. 第78回体力医学会シンポジウムのご案内 …2
3. 第22回運動疫学セミナー開催のご案内 ……2
4. 私と運動疫学 ………………3
5. 会員による英語論文紹介 ………………3
6. 第8回分野横断型勉強会のご案内 ……………4
7. 会員による海外情報 ………………4

第78回体力医学会シンポジウムのご案内

学術委員長／神戸大学 原田 和弘

日本運動疫学会学術委員会では、運動疫学研究の成果を、体力医学会会員に発信・相互作用し、連携・相互発展を図ることを目指した企画を行っています。その一環として学術委員会では、第78回日本体力医学会特別大会(2023年9月17日、早稲田大学)でのシンポジウム「人生100年時代の多様化するニーズに寄与する運動疫学研究」(11:10～12:10、大隈記念講堂小講堂)を企画しました。

近年、人生100年時代の到来が盛んに叫ばれています。例えば、厚生労働省による令和2年版厚生労働白書では、2040年に65歳となる女性の2割が約100歳まで、2040年に65歳となる男性の約4割が90歳まで到達すると推計されています。人生100年時代においては、高齢者像が一層多様化することに伴い、身体活動・運動を通じた支援ニーズの多様化も一層進むと見込まれます。そこでこのシンポジウムでは、人生100年時代にますます顕在化するであろう4つの課題(フレイル・サルコペニア、メンタルヘルス、社会的つながり、デジタル・ディバイド)に

焦点を当て、これらの課題解決に果たす身体活動・運動の役割に関する最新知見や今後の展望について議論する予定です。具体的には、これら4つの課題のうち、フレイル・サルコペニアについては医歯薬基盤・健康・栄養研究所の小野玲先生から、メンタルヘルスについては東京医科大学の菊池宏幸先生から、社会的つながりについては帝京大学の金森悟先生から、また、デジタル・ディバイドについては九州大学の岸本裕歩先生からお話いただいた後、会場の先生方と意見交換する予定です。



当日のこのシンポジウムの持ち時間は1時間と限られておりますが、多様な専門領域の先生方と本テーマについて活発に議論できれば幸いに存じます。ぜひお誘いあわせの上、多くの先生方のご参加をお待ちしております。

第22回運動疫学セミナー開催(4年ぶり!)のご案内

セミナー委員長／東北大学 門間 陽樹

第22回運動疫学セミナーを下記の日程で開催いたします。運動疫学セミナーは「身体活動・運動の関連分野における疫学マインドを広めること」を目指し、体系的でわかりやすい講義とグループワークによる研究計画立案演習で構成される2泊3日のプログラムです。日本運動疫学会の理事・セミナー委員を中心とした運動疫学研究の第一線で活躍する講師陣が担当しています。COVID-19の流行により2019年の開催が最後となっていましたが、4年ぶりの開催となります。従来の内容を踏襲しつつも、さらに充実したセミナーとなるよう現在プログラムを検討中です。

日本運動疫学会の会員・非会員を問わず参加可能です。セミナーに一度も参加したことがない方、再度理解を深めたい方、あるいは、新たな運動疫学セミナーを体験したい方の参加を心よりお待ちしております。



日 程：2023年9月8日(金) 13:00～
9月10日(日) 16:00まで(2泊3日)
会 場：帝京大学箱根セミナーハウス
(http://www.teikyo.jp/hakone_seminar/)
〒250-0408 神奈川県足柄下郡箱根町強羅 1300-30
(箱根登山電車強羅駅より一番坂登る:徒歩5分)
参加申込：日本運動疫学会のホームページ(6月上旬頃を予定)
受講料：

【日本運動疫学会会員】

一般(有職者) 40,000円 学生 35,000円

【非会員】

一般(有職者) 45,000円 学生 40,000円

定員：約30名(定員になり次第、締め切ります。)

以下の2コースから1つお選びいただきます。

ベーシック(講義)コース

【目 標】 講義を受けながら研究デザインを意識して研究計画の立案ができるようになる。

【課 題】 グループワークにて観察研究/介入研究の研究計画を1つ立案し、発表する。

アドバンス(演習)コース

【目 標】 社会の問題の解決を図る課題を設定し、研究助成の獲得や国際誌でのアクセプトが期待できそうな研究計画を立案する。

【課 題】 グループワークにて社会実装を見据えた研究計画を立案し、発表する。(必要に応じて下位課題も設定する)

私と運動疫学

埼玉県立大学 北畠 義典

私が運動疫学と出会ったのは1994年に現在の公財・明治安田厚生事業団体力医学研究所に入所した時です。研究所には本学会の前身である運動疫学研究会の立ち上げのメンバーのおひとりである荒尾孝先生（公財・明治安田厚生事業団体力医学研究所、早稲田大学名誉教授）と現在の日本運動疫学会の初代理事長の種田行男先生（中京大学）の両先生がいらっしゃいました。当時、研究所では先駆的に「高齢者の健康づくり」をテーマとしたプロジェクト研究が展開されていました。お二人は常に疫学手法を用いた研究の必要性・重要性を唱えておられました。私自身その当時は運動生理学を中心とした研究を進めてきておりましたので、新たに疫学を学ぶこととなりました。

1998年10月には第53回日本体力医学会の前日に第1回運動疫学研究会が開催され、会場は立ち見が出るほどの盛況ぶりで、運動疫学という研究領域への関心の高さと期待が大きいことを目の当たりにしました。翌年の1999年には第1回の運動疫学セミナーが1泊2日で開催され、第5回からは2泊3日でベーシックとアドバンスの2コースが設定されました。私はほぼ毎年、運動疫学セミナーに受講者として参加しておりましたが、ある

講師から「いつまでも受講生では困りますね～」というお声を掛けられました。その後2010年から2018年まではセミナー委員長を仰せつかって講師を務めさせていただきました。この間、私自身、疫学の理解を深めるためにいろいろな疫学セミナーと称するものに参加し、そこで学んだ知識や情報を運動疫学セミナーの企画・運営に反映させることができたのではないかと考えております。



私は疫学手法を学んだことで、医学、公衆衛生学、体力科学、栄養学などの他領域の研究者とのご縁が大切な財産となっております。近年、若手の研究者に研究領域を尋ねると「運動疫学です。」と答える方が増えているように思います（気のせいでしょうか？それともバイアスか？）。日本運動疫学会の役員は他の学会に比べると若いメンバーで構成されています。そして、若い優秀な研究者が活躍しています。今後、本学会が益々発展するように微力ながら支援をする所存です。

【会員による英語論文紹介】

Seino S, Kitamura A, Abe T, Taniguchi Y, Murayama H, Amano H, Nishi M, Nofuji Y, Yokoyama Y, Narita M, Shinkai S, Fujiwara Y. Dose-response relationships of sarcopenia parameters with incident disability and mortality in older Japanese adults. *J Cachexia Sarcopenia Muscle*. 2022; 13: 932-944. doi: 10.1002/jcsm.12958.

高齢期の身体組成や身体機能は、要介護化や余命に対して異なる影響をもつのではないかと考えられてきました。しかし、各指標の健康予後に対する独立した影響やその関連形状に関する検討は十分でなく、特に欧米人に比べてやせ型であるアジア人のデータは、絶対的に不足していました。そこで本研究では、日本人高齢者の身体組成（骨格筋量・脂肪量）と身体機能（握力・歩行能力）が要介護化・余命に及ぼす独立した影響を量反応曲線によって検討しました。

高齢者健診受診者1765名を平均5.7年（最大9.5年）間追跡しました。身体組成指標として①骨格筋指数と②脂肪指数を、身体機能指標として③握力と④通常歩行速度をそれぞれ評価し、これら4指標と新規要支援・要介護認定および総死亡との関連形状を分析しました。

その結果、男女とも一貫して、骨格筋量や脂肪量に関わらず、筋力・歩行能力が高いほど要介護状態になりにくく、低いほどなりやすいという関係性が明示されました。一方、余命に対しても筋力・歩行能力が強く影響するものの、これらとは独立して、男性では骨格筋量が多いほど余命が長いという正の関係性がみられました。女性では脂肪量が高値であっても余命に有意な影響はなかったものの、脂肪量が少ないほど余命が短いという関

東京都健康長寿医療センター研究所 清野 諭

係性が示されました。

本結果から、高齢期の介護予防では、骨格筋量・脂肪量が多い／少ないに関わらず、まずは身体機能の維持・向上を一次予防のターゲットと据えるべきであることが明示されました。一方、余命延伸の観点では、身体機能の維持・向上だけでなく、骨格筋量（男性）や脂肪量（女性）減少による“痩せ”にも注意を払う必要性が示唆されました。

当研究チームのホームページ (<https://www.healthy-aging.tokyo/>) では、高齢者の多様な通いの場に筋力運動や食習慣チェックを導入するためのテキスト・ツール等を公開しております。いずれもフリーダウンロード可能ですので、現場指導等にご活用いただければ幸いです。



テキスト・ツール等のコンテンツはこちら
<https://www.healthy-aging.tokyo/>

第8回運動と健康：分野横断型勉強会のご案内

学術委員会委員／帝京大学 天笠 志保

運動と健康：分野横断型勉強会は、身体活動と健康に関連したテーマを幅広く扱い、様々な分野の研究者が学び、交流することを目的とした勉強会で、例年、体力医学会大会の前日に開催しています。今年度は日本体力医学会が学会大会ではなく、特別大会となりますが、例年通り、勉強会を企画しております。9月16日(土)15時～17時にハイブリッド形式(会場：早稲田大学早稲田キャンパス)で行う予定です。

今回のテーマは、身体活動研究において加速度計の活

用が普及していることを踏まえ、「加速度計で身体活動を測ってみよう!」としました。加速度計を用いた身体活動計測の基礎から分析の実際まで取り上げる予定です。まだ加速度計を使用した身体活動研究行ったことがない方から、既に研究を行っている方まで多くの方のご参加をお待ちしております。詳細は追って連絡します。



会員による海外情報

東洋大学 神野 宏司

新型コロナウイルス感染症がまだまだ落ち着かない中、2022年3月末より1年間、アメリカ合衆国ミネソタ州にあります、University of Minnesota (ミネソタ大学)のツインシティ・キャンパスにて研究期間を得ることができました。所属した研究室はCollege of Education and Human Development (学部)のSchool of Kinesiology (学科)にあるPhysical Activity Epidemiology Laboratoryと、Zan Gao教授のもとに韓国、中国、エジプト、ナイジェリア、スペインといった多数の国から若手が集う国際的な研究室です。Exercise gaming やオンライン介入研究を積極的に行っている研究室でコロナ禍の2021年にも10編以上の論文を発表しています。とはいえコロナ禍のなか学内の授業、研究ともに大きな制限がかかり、介入研

究はままならず、秋まではシステムティックレビュー中心の研究活動、11月以降になってようやく人を対象とした研究がスタートしたという状況でした。このような状況はほかの研究室でも同様で特に大学院生はかなり苦労を強いられている様子でした。それでも学内ではオンラインを利用した各種のレクチャー、ディスカッションが開催され、また博士号を持つ図書館スタッフによる研究支援コースの開催と日本との違いを感じることも多くありました。



キャンパスがあるミネアポリスには5大プロスポーツのチームがあり、ミネソタ大学のスポーツチームもNCAAのDivision 1に属する強豪ということもあり、また、州内には10000以上あるといわれる湖が冬季には凍結し、その上で老若男女を問わずアイスホッケーを楽しむことが生活に根付いている様子にはスポーツが地元の住民をつなぐ役割を果たしていることに驚くとともに、このような様子は滞在しなくては実感できなかったと感じました。ミネソタはアメリカの冷蔵庫といわれ、冬季には-20℃を下回る厳しい気候の地ですが、そこにあっても身体活動やスポーツは特別なものではなく日常生活のなかにある楽しいもの、として受け止められているように思いながら過ごした一年でした。



日本運動疫学会の最新情報は公式ホームページを確認してください。公式HP：<http://jaee.umin.jp>

- ・会員の投稿論文を募集しています。
- ・会員の運動疫学研究を支援しています(セミナー、勉強会、プロジェクト研究)。
- ・新規会員を随時募集しています。



発行：日本運動疫学会
編集：日本運動疫学会 広報委員会
日本運動疫学会事務局

〒359-1192 埼玉県所沢市三ヶ島2-579-15
早稲田大学スポーツ科学学術院内
E-mail：jaee.info@gmail.com